

佳作
「続けていこう」

感王寺 美智子さん

ある日、何気なくスツと、左の乳房を撫でると、何かシコリのようなものに触れた。

「しまった」と思った。

半年前、夫と一緒に、健診予約を入れていた。その前日、夫は知人の結婚式だった。

「ダルいな。僕、昨日、ちょっと、お酒、飲んじゃったし、今回はキャンセルするよ」

仕方ない、ひとりで電車で行くかと思ったが、夫のシレッとした顔を見ていたら、なんだか、気力が無くなってしまった。

「ま、いいか。私も、や一めた！またすぐ予約し直して、一緒に行けばいいわよね」

自分で自分にいい訳をした。

そして半年後。

「ま、いいか」の「ま」は、「しまった」の「ま」に、変わってしまったのだ。
「乳癌です」

ステージⅡB。リンパ転移あり。

半年前に、検診に来て見つけていれば、転移は、なかったかもしれない。と言われた。

「僕のせいだ。僕が行かないって、言ったからだ」

夫は、自分を責めた。

手術、抗がん剤、放射線、ホルモン治療のフルコース。ほんの数か月の発見の遅れで、治療の負担は大きくなり、ひいては生死を分けることにもなるのだ、ということ思い知らされた。早期発見がどれだけ大事か、痛感させられた。

「被災地へ復興支援に行かないか？」

抗がん剤治療を終える後、夫が言った。

癌になったことによって、私達夫婦は、何かが変わっていた。

夫は、復興支援職員に志願し、被災地の新病院建設にあたることになった。

「住民の健康管理がしっかりとできる、病院づくりをしたい」

夫は、そう志した。そして私達は、気仙沼の仮設住宅で、被災者の皆さんと共に、暮らし始めた。

仮設住宅は、寒く不便な環境だったが、だからこそ、住民たちは、日頃から、互いの健康を気にかけていた。

「震災前は、震災も病気も『なった時はなった時』と思ってたけど、今は違う。そりじゃダメだ。震災も自分の体んことも、いつも、しっかり、見ておかねえとダメだ。忘れちゃダメだっちゃ」

暮らし始めて一年半後、ようやく建設がはじまった新病院は、仮設住宅からよく見えた。

「遠くまで行かねえでいいように、いい病院さ、つくってくれっちゃ」

頻繁に来てくれる医療ボランティアの人たちの話を、みんな真剣に聞いていた。

「あんまり、早よ、とうちゃんのところさ行ったら、怒られるっちゃ。生かされた命、粗末にしたら、バチがあたる」

万歩計をつけたり、体操をしたり、健康維持にも務めた。

「若いもんに迷惑かけねえようにすんには、先ずは、自分の健康管理だべ」

みんな、ズロズロと健診に行った。

「もうババアだすけ、病気になってる暇はねえ。でも健康診断に行くくらいの暇ならあるっちゃ！」

引きこもりがちの住民の尻を叩いて連れて行った。

「さあ、今日も健康、いただきます！」

そしてその後、集会場で、みんなで作って食べる豚汁やバラ寿司の美味しかったこと。

「おい、トーチョーの人、アンタ、ちゃんと、オッパイのパトロールしてるべか？」

他所から来た私の尻まで、叩いてくれた。

一日、一日、健康を噛みしめながら、四年半を、皆さんと共に生きた。自分の命を愛おしむことを教えられた。

そして、私達は、昨年、気仙沼を離れ、同じ被災地である熊本へ来ることになった。

気仙沼での経験を、同じ被災地熊本で活かす為だ。

気仙沼へ来た時、抗がん剤終了直後で、大仏様みたいだった私の髪も、随分と長くなった。

「熊本も、よろしく頼むべ」

気仙沼のみなさんは、同じ被災地の人たちを思い、そう言って手を振ってくれた。

そうだ。

復興も、検診も、継続なんだ。

続けていこう。繋げていこう。

この、いのちを。